

史料

1707 年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料
——飯作家「大地震富士山焼之事覚書」の調査と翻刻——

気象研究所地震津波研究部* 小林昭夫・弘瀬冬樹

産業技術総合研究所活断層・火山研究部門** 堀川晴央

防災科学技術研究所社会防災システム研究部門*** 平田賢治

京都大学大学院理学研究科地球物理学教室**** 中西一郎

A Historical Record on the 1707 Hōei Earthquake and Hōei Eruption of
Mt. Fuji: Investigation and Reprint of the “Memorandum of
a Large Earthquake and an Eruption of Mt. Fuji”
in the Documents of Iisaku Family

Akio KOBAYASHI and Fuyuki HIROSE

Seismology and Tsunami Research Department, Meteorological Research Institute,
1-1 Nagamine, Tsukuba, Ibaraki, 305-0052, Japan

Haruo HORIKAWA

Research Institute of Earthquake and Volcano Geology, National Institute of Advanced
Industrial Science and Technology, 1-1-1 Higashi, Tsukuba, Ibaraki, 305-8567, Japan

Kenji HIRATA

Integrated Research on Disaster Risk Reduction Division, National Research Institute for
Earth Science and Disaster Resilience, 3-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki, 305-0006, Japan

Ichiro NAKANISHI

Department of Geophysics, Graduate School of Science, Kyoto University,
Kitashirakawa Oiwake-cho, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8502, Japan

(Received September 25, 2017; Accepted December 19, 2017; published online on ■■■■, 20 ■)

§1. はじめに

宝永地震は、宝永4年10月4日未刻（1707年10月28日午後2時頃）に発生し、マグニチュードが8.6に及ぶとされ〔宇佐美（2003）〕、南海トラフ沿いで繰り返して発生

してきた地震〔Ando（1975）〕として知られているものの中では最大級である。本震発生の翌日卯刻（午前6時頃）には静岡県富士宮市付近で大きく揺れた余震が発生し、同年11月23日（1707年12月16日）には富士山が噴火した〔武者（1943）〕。これらは時間・空間ともに近接していることから、相互に関係している可能性がある。こうした相互作用を考察するためには、駿河湾周辺域での宝永地震の記録を収集・分析することが必要である。

* 〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1

** 〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

*** 〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1

**** 〒606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町

静岡県富士宮市の富士本宮浅間社（現在の富士山本宮浅間大社）における宝永地震、富士山宝永噴火の様子を記した史料には、「大地震富士山焼出之事」と「大地震富士山焼之事覚書」がある。

「大地震富士山焼出之事」（東京大学地震研究所に所蔵されていることから、以下、震研本と称する）は服部・中西 (2017) などにより扱われている。この史料は富士本宮浅間社（場所は Fig. 1 参照）の社僧により書かれたもので、宝永地震の本震・余震による揺れや被害状況の他、その後に発生した富士山の噴火の様子、神社の復興や富士山噴火を沈静化するための祈祷に関することが記されている。震研本は、『富士の歴史』[井野辺 (1928)] や『浅間文書纂』[浅間神社社務所 (1931)] に掲載されている史料（史料名はいずれも「大地震富士山焼出之事」）の原本（底本）に近い史料である可能性が指摘されている[服部・中西 (2017)] もの、これらの文献の翻刻文中には、翻刻できないことを示す□（ハコ）部分が多く見られる。服部・中西 (2017) は、これが破損箇所であるため決して復元できないことを明らかにした。したがって、この史料に記されている事象をより正確に読み取るためには、別の史料の発掘が必要となる。

本報告で取り上げる「大地震富士山焼之事覚書」は、

この□部の記述を補う史料である。本史料の翻刻は『新収日本地震史料続補遺 別巻』（以下、『新収』）[東京大学地震研究所 (1994)] の 34 ページ下段から 35 ページ上段にかけて収録されている。『新収』に付されている史料情報によると、関連地名は静岡市、史料名は「飯作家文書」、史料提供機関は静岡県史料編さん室である。本史料（以下、飯作家本）の内容は、震研本のものとはほぼ同一である上に、文字の欠落箇所はほぼなく、震研本に代わりうる史料と考えられる。しかし、『新収』では、地震に関する記述のみが翻刻され、また、筆者らが知る限り、『新収』以外には、この史料の翻刻を掲載している文献はない。そこで本論文では、『新収』の翻刻に使用された原本を調査し、全文にわたって翻刻するとともに、既存の史料と比較した結果を報告する。

§2. 「大地震富士山焼之事覚書」の調査

静岡県史料編さん室が保有していた画像資料は、現在は静岡県立中央図書館歴史文化情報センターで管理されている。1985 年から 1997 年に実施した静岡県史編さん業務で、当時静岡市内に所蔵されていた飯作家本「大地震富士山焼之事覚書」が静岡県職員によって 35mm フィルムに撮影された。その写真画像は、2009 年度にデジタル化され、フィルムおよび紙焼写真も同センターにて保管されている。元のフィルム劣化等によりデジタル画像の質は低い。実際には『静岡県史』[静岡県 (1996a)] の宝永地震に関する編さんでは飯作家本は使われず、浅間神社社務所 (1931) の翻刻文が使われた。静岡県史料編さん室では富士山本宮浅間大社の文書調査を行ったが、この翻刻文の原本（底本）を見つけることは出来なかった[以上、静岡県立中央図書館歴史文化情報センター (2016, 私信)]。

初めにこのデジタル画像に基づいて翻刻を行った。白黒画像であるため、筆跡か虫損かの判断がつかない箇所があった。そのため、本文書の原本に戻って確認を行う必要があると判断し、同センターのご協力の下、所蔵者と連絡を取り、本文書の原本の確認と写真撮影の許可をいただいた。2016 年 8 月に、現在原本が保管されている南伊豆町の所蔵者宅を訪問し、所蔵者立ち合いの下、デジタルカメラで新たに原本を撮影するとともに、デジタル画像データでは判読が難しい箇所の記載を確認した。

飯作家本の撮影画像を Photo 1 に示す。飯作家本は表紙を含めて 6 丁から成る短いものである。虫損以外に大きな破損箇所はない。表紙の右下には四角の朱印が 2 つ斜めに入っているが、印影がはっきりせず解読できなかった。

本史料の特徴は、本文の前半、特に宝永地震の翌朝に

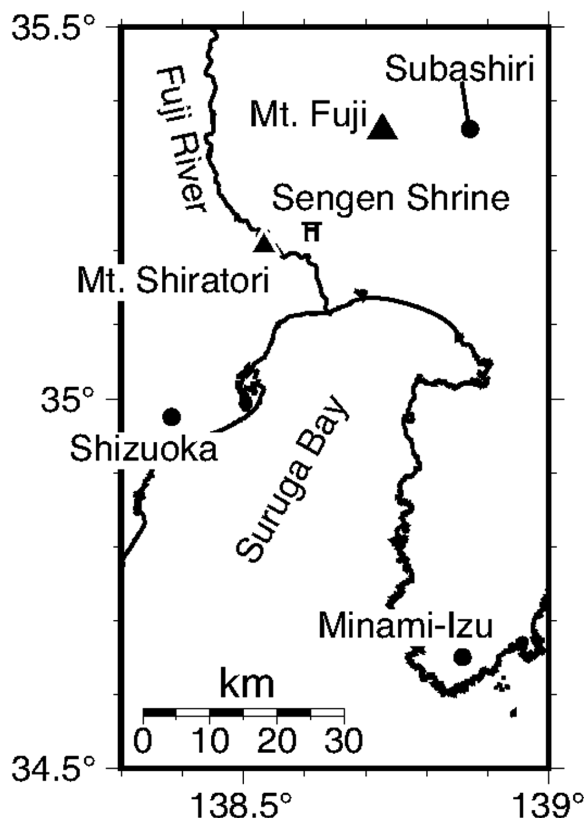


Fig. 1. Map showing the location of the study area.

発生した余震に関する記載に、挿入を示す「。」や書き直しが多く見られることである。ルビはほぼ全て片仮名で振られているが、本文と同一人物の手によるものかは判断できない。

§ 3. 「大地震富士山焼之事覚書」の翻刻とその内容

翻刻文を Fig. 2 に示す。翻刻にあたっては、旧漢字・異体字は常用漢字に、変体仮名は現代仮名に直した。

内容は 3 部からなり、記されている出来事は概ね時系列順である。宝永地震本震と翌朝-史料中では「明六ツ少シ過」(16 行目) - に発生した余震に関する記述に始まり、富士山の噴火に関する記述が続く。新たに一つ書き(71 行目) を起こした上で、「当社」と記された神社(後述するように富士本宮浅間社)の復興と富士山噴火沈静化のための祈祷に関することが記されて終わり、史料の来歴に関する記載はない。文章量は、富士山の噴火にまつわる箇所が最も多い。

本史料では、宝永地震本震、宝永地震翌朝の余震のほかに、小田原地震と呼ばれる地震に触れられている(9~10 行目)。この地震は、「此前五六年」の「夜半之事」と、5~6 年前の夜中に発生し、「当国軽事也」と観測地における被害は小さかったことが述べられている。宝永地震の発生した 1707 年の数えて 5~6 年前にあたる 1702~1703 年の夜半頃に発生した地震という条件から宇佐美 (2003) を参照すると、本史料の「小田原地震」とは元禄 16 年 (1703 年) に発生した元禄関東地震と考えられる。宇佐美 (2003) では、この地震により特に小田原で被害が大きかったことが指摘されている。

翌朝の余震の揺れは「昨日之三双倍」(16 行目)、つまり、宝永地震本震より 2, 3 倍も揺れが強かったと記され、「立て歩む事あたはず」(16~17 行目) と、揺れている間は立って歩くことがままならず、「這々ところひ」(17 行目) とあり、這って動くことすら難しかったことが述べられている。気象庁の震度階級の解説 [気象庁 (2016)] に照らすと、震度は 6 強 (以上) に該当する。以上、観測地における 3 つの地震の揺れの強さを整理すると、宝永地震の翌朝の余震が最も強く、次いで、宝永地震本震、最も弱いのが元禄関東地震と考えられる。

71 行目からは「当社本宮」という書き出しで始まり、本宮を置く神社に関する記載が続く。「当社本宮」が破損し、宝永噴火までの「六七年」(71 行目) にわたって江戸幕府に修繕を願い出ていることが記されている。このことから、本宮の破損は、宝永地震やその余震以前から生じていたと考えられる。

§ 4. 既存の史料や翻刻文との比較

§ 1 で触れたように、これまでに公開されている類似の翻刻文は複数ある。この章では、飯作家本と震研本を比較し、内容の違いを検討する。加えて、同じ飯作家本の翻刻文である『新収』に掲載された翻刻文と比較する。

4.1 震研本との比較

震研本に関しては、服部・中西 (2017) により原文の掲載とともに、全文が翻刻されている。この翻刻文と飯作家本の翻刻文 (Fig. 2) を、原文ともども比較する。

飯作家本に記述されている内容およびその順番は、震研本と同じと言ってよい。但し、震研本には見られる著者名や来歴の記載が飯作家本にはなく、飯作家本中の神社の具体名は明記されていない。字句レベルでは、宝永地震に関する箇所だけではなく、富士山の噴火や神社に関する記載を含め、震研本と飯作家本とでは表現自体が一致する箇所が頻出する。したがって、これら 2 つの史料は起原を同じくするものと考えるのが自然と判断され、飯作家本に書かれた神社は富士本宮浅間社と考えられる。

しかしながら、差異が見られる箇所や、震研本では読めない箇所があるので、以下、両本の異同や震研本で□部にあたる箇所の飯作家本中でわかるもののうち、主要なものを列挙する。

服部・中西 (2017) でも述べられているとおり、震研本には、筆者の年齢を示す「我拾六才之時也」という文章が記されているが、飯作家本にはない。

1703 年元禄関東地震 (史料中は「小田原地震」) の被害の程度については、前述のとおり、飯作家本では被害が軽かったことが読み取れる。このことは『新収』も同様の翻刻であるが、震研本では「当国□事なり」と破損箇所にあたり、被害の程度が読み取れない。飯作家本の記述は 1703 年元禄関東地震の震央推定に資すると考えられる。

震研本の宝永噴火に関する記述中の□部は、地震に関する記述中の□部に比べると少ないが、飯作家本はこの箇所についても不明な点はなく全て翻刻可能である。富士山の噴火が始まった時刻について、飯作家本では「昼四ツ時ニ」(28 行目)、震研本では「昼四ツ過ノ頃」と少し違いがある。また、噴煙の中の光の大きさについて、飯作家本では「八九尺壺丈」(52 行目)、震研本では「七八尺壺丈」と表現が異なっている。

飯作家本にも、震研本と同様、宝永噴火で各地の被害状況が記されている。震研本との比較において重要なのは、震研本で破損箇所にあっている須走 (場所は Fig. 1 を参照) で降り積もった砂の量が「七八尺 (八九尺カ)」(62 行目) と 8 尺 (2.4m) 前後であることが読み取れることである。須走で降り積もった砂の量として、静岡県

(1996b)では「大地震并砂大変之覚」中の壺丈(10尺)という記述が掲載されている。

噴火後の光景として、飯作家本は「早朝に見るに焼出たる穴見へ 吹き出しの砂本に新山を作る 是を諸俗宝永山と号之今以如是」(68~70行目)と記す。翌朝になって、噴火口が見え、人々が宝永山と呼ぶ新山が形成されたという意だが、震研本では噴火口や宝永山に関する記述は全て省略されている。

「当社」の復興や祈祷に関する箇所では、震研本の方が文書としての完成度が上がっている。まず、より内容を詳しく記す傾向が認められる。以下、例を示す。

(1) 飯作家本では「出府いたし」(72行目)のところが、震研本ではその後に「相詰」が付け加わり、江戸に滞在していたことがわかる。

(2) 飯作家本では単に「御祈祷被為仰付」(73行目)のところが、震研本では「御祈祷可修旨被為 仰付奉御請」と、幕府からの依頼だけでなく、神社側が請けた旨の情報が加わっている。

(3) 飯作家本では「七日之修行」(75行目)のところが、震研本では「七日之御祈祷修行」と祈祷したことが加わっている。

(4) 震研本では、「御祈祷修行結願之朝」に「富士山すさましく鳴」ったのちに、「忽ち山火消」とあるが、飯作家本には「富士山すさましく鳴」に対応する表現は見られない。

(5) 飯作家本では単に「四人一同に」(76行目)のところが、震研本では「即刻四人一同に」と、行動の早さが強調される。

(6) 飯作家本では単に「本宮」(77行目)と表現されているところが、震研本では「本たる富士本宮」と、富士本宮浅間社であることが強調されている。

また、敬語表現の修正、闕字(相手への敬意を示すために空ける一字分の空白)の適切な位置への追加がなされている。例えば、飯作家本では「目出度しと被仰」(82行目)とある箇所が「御祝着被遊候」と、表現がより丁寧になり、飯作家本では「頂戴」(84行目)とだけあるところが、「頂戴奉る」と敬語表現が加わっている。闕字に関しては、飯作家本では「御 公儀」(71行目)とあるところを「 御公儀」と改められ、「仰付」(73行目)と「御城」(79行目)の前に、震研本では闕字が補われている。

4.2 『新収』中の翻刻との比較

前述のとおり、『新収』では、飯作家本「大地震富士山焼之事覚書」の地震に関する部分のみが翻刻されている。『新収』の翻刻文と我々による翻刻文(Fig. 2)との主な違いは以下の通りである。

(1) 16行目右側挿入部分「三双倍」、『新収』では「三度

位」。

(2) 18行目右側挿入部分「絶入計の思ひ□□」、『新収』では「絶へ」。

(3) 18行目「居屋」、『新収』では「居屋敷長屋」。

(4) 19行目「地割」、『新収』では「池割」。

(1) は本震翌朝の余震について、「大地震昨日之三双倍」と表現している部分で、原文の画像(Photo 1)からも「三双倍」の方が適切である。震研本でも「三双倍」となっている。「三度位」では余震の揺れの大きさに関する情報が、余震の頻度に置き換わってしまっている。ここで本来読み取れるのは、余震の揺れが本震よりも余程強かったという、本震および余震の震源域を推定するにあたってきわめて重要な情報である。

(2) と(3) は行末の小さな字をどちらの行の文字として読むかの違いで「計の思ひ□□」と「敷長屋」と翻刻された。震研本ではこの部分は「□□計の思ひなり」「村家之居屋□れ潰る事」となっている。震研本と飯作家本とでは語順の大きな乱れは見られないため、行末の小さな字は前の行の続き、すなわち本翻刻が適切と考えられる。

(4) は原文の画像(Photo 1)から明らかに「地割」で、『新収』の翻刻は出版時の誤植かもしれない。

§5. 「大地震富士山焼之事覚書」の性格

本史料の内容や、震研本との比較・検討を踏まえ、本史料の性格を議論する。

「当社」という表現で富士本宮浅間社が記されていることから、飯作家本は『新収』の史料情報に記された静岡市ではなく、富士本宮浅間社があった富士宮市で書かれた文書と考えられる。『新収』の史料情報が静岡市なのは、飯作家本を静岡県史料編さん室で写し、本史料の収集地が静岡市だったからと推測される。したがって、6行目から21行目にわたる、地点が明示されていない地震の揺れや被害に関しては、富士本宮浅間社周辺で生じたものと解釈するのが自然であろう。

『新収』では前半の地震に関する箇所の翻刻しかなく、静岡市での揺れや被害の様子と誤解されてしまう。『新収』の凡例には「省略がすべて適切であるとは言えない」と述べられている。本史料については、後半部分の翻刻も含まれる方がより適切であったと思われる。このような例もあるため、現時点では『新収』の翻刻文はあくまでも足がかりとし、歴史地震の研究にあたっては元史料に戻るか、該当する史料を検討した文献を参照する必要があると考えられる。将来的には、元史料に戻る必要の少ない地震史料集に改訂されることが望まれる。なお、この史料が、富士本宮浅間社から50kmほどの距離がある南伊豆町(Fig. 1)の現所蔵者の元にある理由や経緯につ

いては、現所蔵者の先祖の話も伺ったものの不明である。

飯作家本の加筆の特徴は、意味のまとまった単位でなされていることが多い。このことから、飯作家本は一連の文章を推敲する段階の文書、あるいはその忠実な写しの可能性が考えられ、飯作家本に見られる加筆が、筆写に際しての書き損じの単なる修正である可能性は低いと思われる。筆写において加筆が生じうる状況の一つは、ページを多くめくってしまうことがあるが、その場合、加筆すべき文章量は多くなり、飯作家本に見られる、一行に満たない量たりえない、一行飛ばして筆写してしまう場合、文章量的には考え得るが、行を飛ばしたことを補う加筆ならば、意味のまとまりではない加筆になることが多いはずである。また、修正や加筆箇所が余震に関するところに集中しているのも書き損じとするには説得力が低く思われる。単なる書き損じならば、史料全般にわたって散見される方がより自然であろう。

4.1 節での検討にあるとおり、本史料は震研本と同一の起源を有すると考えられるが、飯作家本の方がより古い形を留めていると考えられる。その理由としては、まず、震研本の方が全般に表現が整理され、文書としての完成度が上がっていることが挙げられる。次に、その一方で、震研本にある「我拾六才之時也」という年齢に関する文章の位置づけの不自然さが挙げられる。服部・中西 (2017) は、この文章が前後の文との繋がりが悪いことを指摘し、明和元年 (1764 年) に写されたときに追加されたとしている。

§6. ま と め

静岡県富士宮市の富士本宮浅間社（現在の富士山本宮浅間大社）における宝永地震、富士山宝永噴火の様子を記した史料には、「大地震富士山焼出之事」と飯作家文書中の「大地震富士山焼之事覚書」がある。前者の翻刻文は『富士の歴史』、『浅間文書纂』、服部・中西 (2017) に掲載され、後者の翻刻文は『新収日本地震史料』に地震に関する部分のみが掲載されている。「大地震富士山焼出之事」の翻刻には史料が損なわれたことによる不明箇所が多い〔服部・中西 (2017)〕。

本研究では、「大地震富士山焼出之事」の不明箇所に対応する箇所も翻刻可能なことから、飯作家「大地震富士山焼之事覚書」の原本を確認し、全文を翻刻した。この史料の観測地は『新収日本地震史料』に記された静岡市ではなく、富士本宮浅間社のあった富士宮市と考えられる。1703 年元禄関東地震（史料中は「小田原地震」）の被害の程度について、「大地震富士山焼出之事」では破損箇所にあたり不明だが、飯作家「大地震富士山焼之事覚書」では被害が軽かったことが読み取られ、同地震の震央推

定に資すると考えられる。1707 年宝永地震翌日の余震について、飯作家「大地震富士山焼之事覚書」では余震の揺れが本震よりも余程強かったことがわかり、本震および余震の震源域を推定するにあたってきわめて重要な情報となる。また、飯作家「大地震富士山焼之事覚書」が執筆された時期は、「大地震富士山焼出之事」が執筆された時期より早い可能性が高い。飯作家「大地震富士山焼之事覚書」は、富士本宮浅間社および富士宮市の宝永地震被害、富士宮市から見た宝永噴火、地震被害からの復興に関する史料として、現存知られているものの中では最も完全なもの、かつ、古い時代に記されたものと考えられ、「大地震富士山焼出之事」に代わって、今後の活用が望まれる史料である。

謝 辞

飯作俊岩氏および飯作貞子氏には写真撮影にあたり大変便宜を図っていただきました。静岡県立中央図書館歴史文化情報センターの中嶋都夫氏には研究を進める上で有益な助言をいただきました。住友史料館の安国良一氏には翻刻文の確認をしていただきました。匿名の査読者 2 名からのコメントは、本稿の改善に有益でした。図の作成には Generic Mapping Tools [Wessel et al. (2013)] を使用しました。ここに記して感謝します。

文 献

- Ando, M., 1975, Source mechanisms and tectonic significance of historical earthquakes along the Nankai trough, Japan, *Tectonophysics*, **27**, 119–140.
- 浅間神社社務所, 1931, 浅間文書纂, 浅間神社社務所, 574 pp.
- 服部健太郎・中西一郎, 2017, 1707 年宝永地震と富士山宝永噴火に関する一史料—駿河湾北岸域における宝永地震翌朝に感じた大きな余震及び白鳥山の崩壊を記した行方不明史料の発見と既刊史料集に掲載された翻刻文の検討一, *地震* **2**, **70**, 41–55.
- 井野辺茂雄, 1928, 富士の歴史, 古今書院, 504 pp.
- 気象庁, 2016, 気象庁震度階級関連解説表, 平成 28 年 12 月地震・火山月報 (防災編), 154–156.
- 武者金吉, 1943, 増訂大日本地震史料 第二巻, 文部省震災予防評議会, 754 pp.
- 静岡県, 1996a, 静岡県史 別編 2 自然災害誌, 821 pp.
- 静岡県, 1996b, 静岡県史 通史編 3 近世一, 1208 pp.
- 東京大学地震研究所, 1994, 新収日本地震史料, 続補遺別巻, 1228 pp.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版日本被害地震総覧 [416]2001, 東京大学出版会, 605 pp.
- Wessel, P., W.H.F. Smith, R. Scharroo, J. Luis, and F. Wobbe, 2013, Generic Mapping Tools : Improved version released, *Eos, trans. AGU*, **94**, 409–410, doi: 10.1002/2013EO450001.

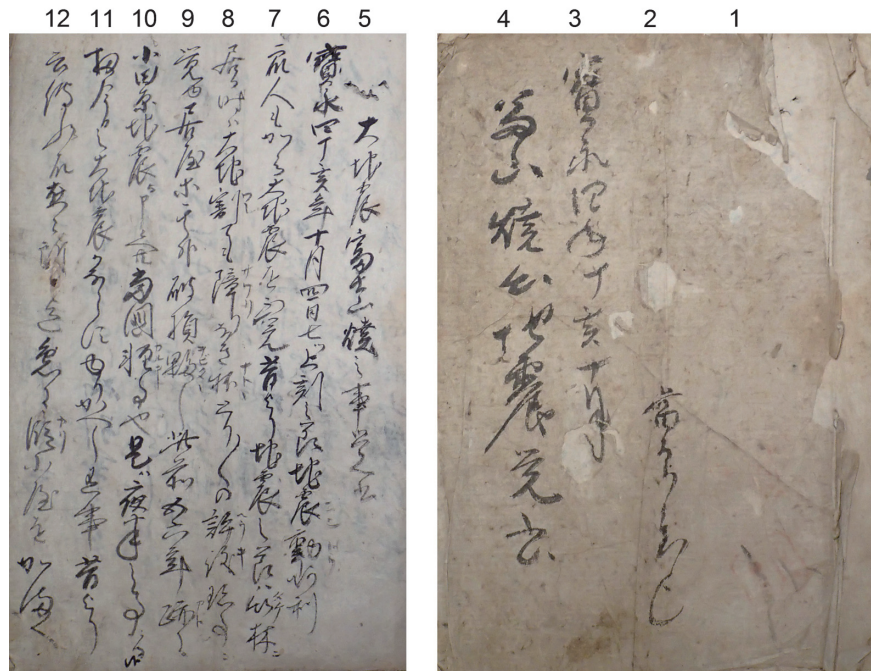


Photo 1. (a)

Photo 1. Photographs of original record about the 1707 Hiei Earthquake and the eruption of Mt. Fuji in the documents of the Iisaku family. Numerals above the photos denote line number.

12	11	10	9	8	7	6	5		4	3	2	1
宝永四年十月四日七ツ上刻之節地震動あり 衆人もかゝる大地震を不覚昔より地震之節ハ竹林ニ 居る時ハ大地割ても障りなき杯とり／＼の評議珍事ニ 覺ゆ居屋等其外破損夥し此前五六年跡に 小田原地震と申候へ共当国輕事也是ハ夜半之事ニ而候 扱今日之大地震かならずゆりかへし有事昔より 云伝ふ故在々所□迄急に仮小屋をかまへ								宝永四年丁亥十月 富山焼出地震覺書 当□□□置申候				
大地震富士山焼之事覺書 シントウ タケ ナト、 サワリ ワレ								⑨ ⑩				

Fig. 2. (a)

Fig. 2. Reprint of Photo 1 made by the present authors. Top numerals denote line number. Sidelines indicate descriptions discussed in the text.

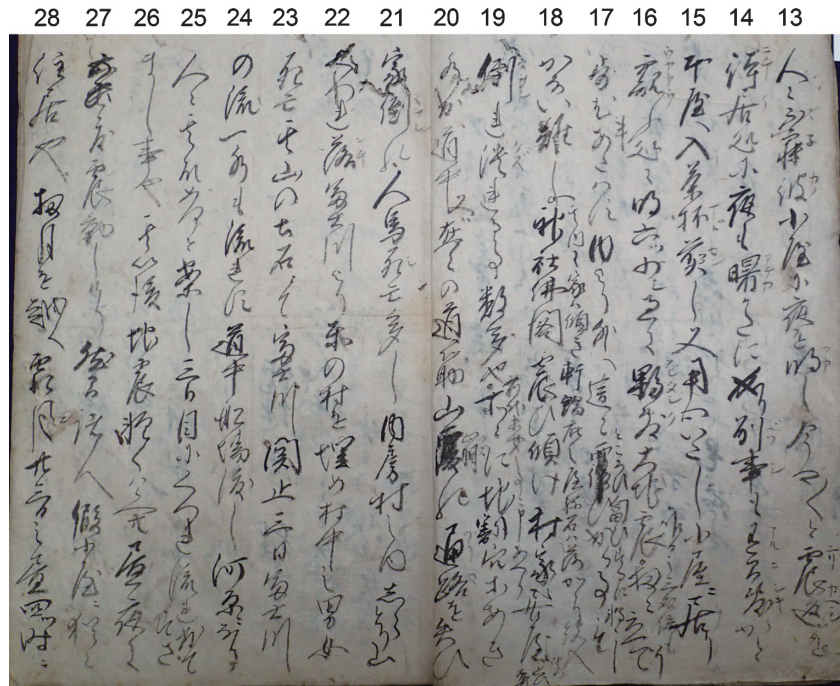


Photo 1. (b)

13 人々不寝彼小屋に夜を明し今やくと震返をユリカヘン

14 待 居処に夜も曙かたに成り別事も有間敷かとニ(マカ)チイ アケカ ベツシ アルニ(マカ)シキ

15 本屋へ入茶杯煎し又用心いたし小屋ニ居りヲ

16 窺ふ処に明六ッ少過に夥敷大地震。扱々立てウカカウ ヲビタシク 昨日之三双倍もいり

17 歩む事あたハす内より外へ這々覆ハ出る事も
ところひ匍ひするに転々し

18 其内に家へ傾き軒端庇之屋ね石ハ落かゝり絶入計の思ひ□□

19 倒れ潰れる事数多也。所々に地割穴等あき
前代未聞之事ニ申あへり

20 水出道中又ハ在々の道筋山覆崩れ通路を失ひタヲレクズ ツウロ

21 家倒れ人馬死亡多し内房村之内しらとり山タヲレ シ

22 くつれ落富士川より東の村を埋め村中之男女ヲチ

23 死亡其山の土石ニテ富士川閑止三日富士川

24 の流一水も流れす道中船場渡し河原ニなり

25 人々其故如何と案し三日目にくつれ流れ出てすさ

26 まし事也其以後地震軽くハ候へ共昼夜に

27 五六度震動しけり然間諸人仮小屋ニ猶々

28 住居也扱月を越へ霜月廿三日之昼四ッ時ニ

Fig. 2. (b)

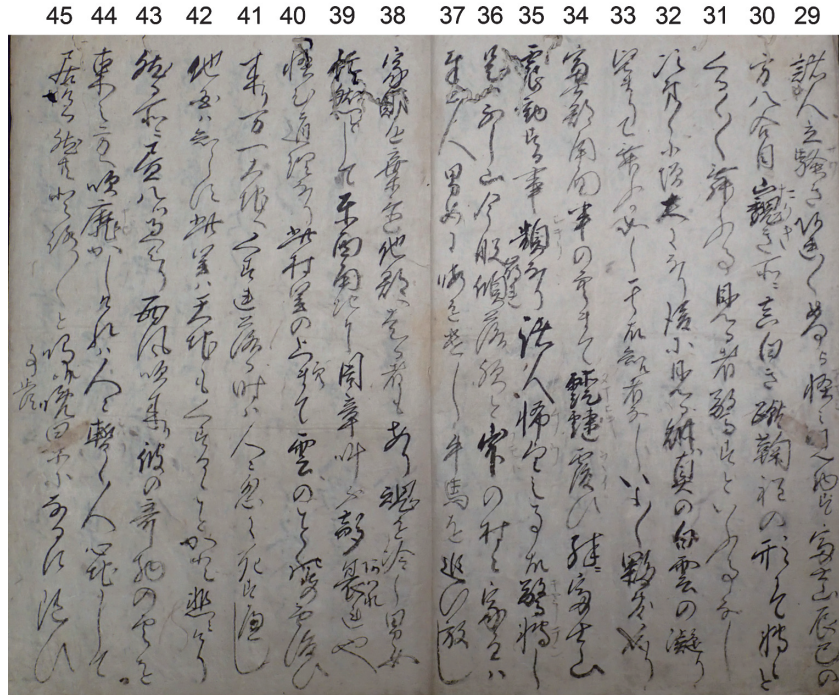


Photo 1. (c)

29 諸人立騒^{サワ}きあれ／＼如何と怪^{アヤシ}み見物す富士山辰巳の
 30 方八合目巍^{たかき}き所^{タチキヲハイ}真白き蹴鞠程の形にて転々と
 31 くる／＼舞ふ事見る者驚^(所に上書き)すといふ事なし
 32 次第／＼に増大になり後に見る 処^ハ真の白雲の凝り
 33 堅まりて舞ふか如し其故知^ケル者なしいよ／＼夥敷成り
 34 富士郡南面半の空まで驟^{シキリ}變^{ケウ}覆^{キヤウテン}ひ殊^{フモト}富士山
 35 震動する事頻^{シキリ}なり諸人怖望^{ケウ}之事故驚^{キヤウテン}転し
 36 是ハふし山今般崩れ傾落歟と山下の村々家主ハ
 37 奉公人男女に暇を遣し牛馬を追ひ放し
 38 家財を棄置他郡へ走る者もあり魂を冷し男女
 39 忙然として東西南北に周章叫^{あハレ}ぶ声哀れ也
 40 怪む道理なり此村里の上空まで雲のことくもの覆ひ
 41 来り万一大地へくすれ落る時ハ人々忽に死すへし
 42 他国ハ知らす此里ハ天地もくすることかと悲^{シハラ}けり
 43 然る所^{ナヒ}昼八ッ過より西風吹来り彼の奇物の雲を
 44 東之方へ吹靡^{ナヒ}かしけれハ人々暫^{シハラ}く人心地して
 45 居ける然共とろ／＼と鳴^ル。晩景になるに随ひ
 事止す

Fig. 2. (c)

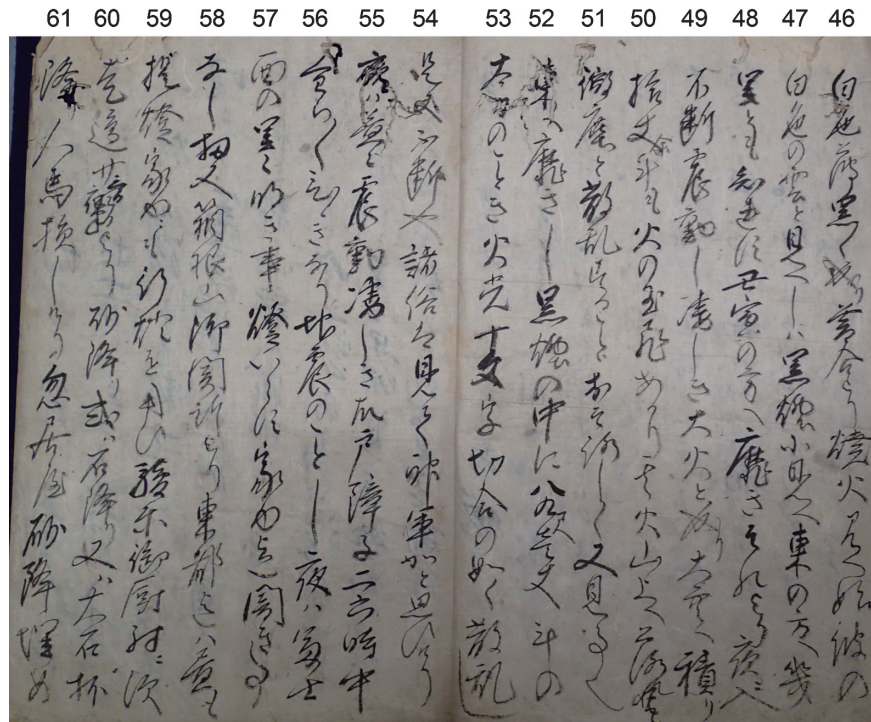


Photo 1. (d)

61	60	59	58	57	56	55	54		53	52	51	50	49	48	47	46
降り人馬損しけり忽居屋砂降埋め	走辺廿三日夜半より砂降り或ハ石降り又ハ大石杯	提灯家内ニも行灯を用ひ駿東御厨殊ニ須	なし扱又箱根山御関所より東都迄ハ昼も	西の里々明き事灯いらす家内迄闇き事	くわらくひききなり地震のことし夜ハ富士	夜ハ益々震動凄しき故戸障子二六時中	是又不斷也諸俗は見て神軍かと思ひけり		太刀のとき火光十文字切合の如く散乱し	東へ靡きし黒煙の中に八九尺丈計の	微塵と散乱することおそろしく又見事也	拾丈余計も火の玉飛あかり其火山上へ落れは	不斷震動し凄しき大火と成り大空へ積り	里とも知れず丑寅の方へ靡きそれより夜ニ入	白色の雲と見へしハ黒煙に見へ東の方へ幾	白色薄黒く成り暮合より焼火見へ始彼の

Fig. 2. (d)

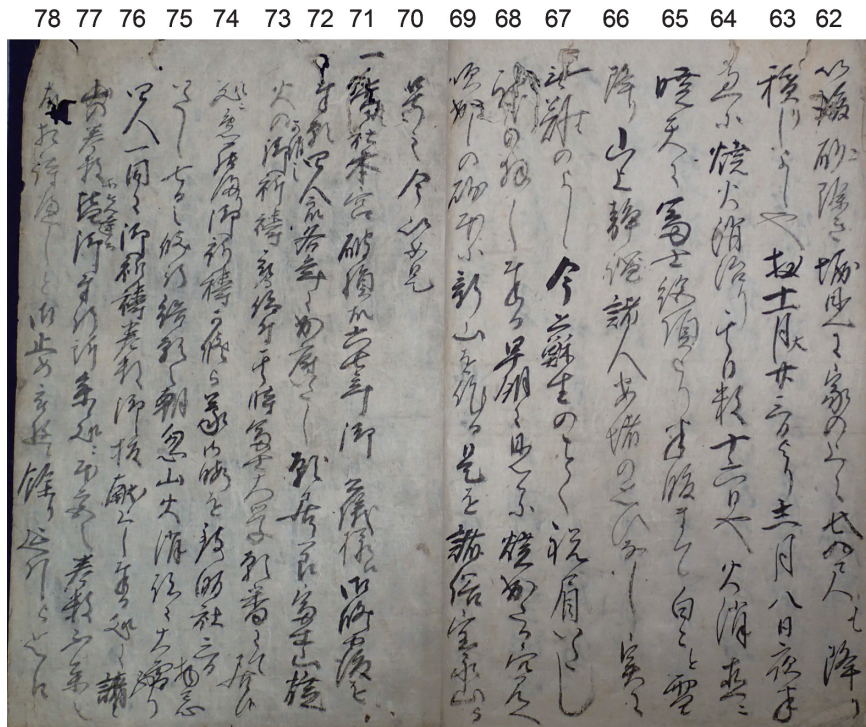


Photo 1. (e)

78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62

以後砂除き堀見に家の上に七八尺(八九カ)も降り
 積りしよし也扱十一月大廿三日より十二月八日夜半
 過に焼火消治り其日数十六日也火消直^ニ
 暁天に富士絶頂より半腹まで白々と雪
 降り山上静謐諸人安堵の思ひなし実に
 無難のよし今蘇生のことく祝眉いたし
 神の拝し奉る早朝に見るに焼出たる穴見へ
 吹出しの砂本に新山を作る是を諸俗宝永山と
 号之今以如是

一当社本宮破損故六七年御公儀様江御修覆を
 奉願四人衆各年に出府いたし願居候節富士山焼
 火の可消之御祈禱被為仰付其時富士大学願番にて居候
 処ニ急罷帰り御祈禱可修と蒙御暇を致帰社三日物忌
 いたし七日之修行結願之朝忽山火消跡に大雪ふり
 四人一同に御祈禱卷数御被献上し奉る処に諸
 山の卷数等先達而皆御奉行所参候処ニ本宮之卷数不参之
 故相待へしと御止め被遊候余り延引と思召

Fig. 2. (e)

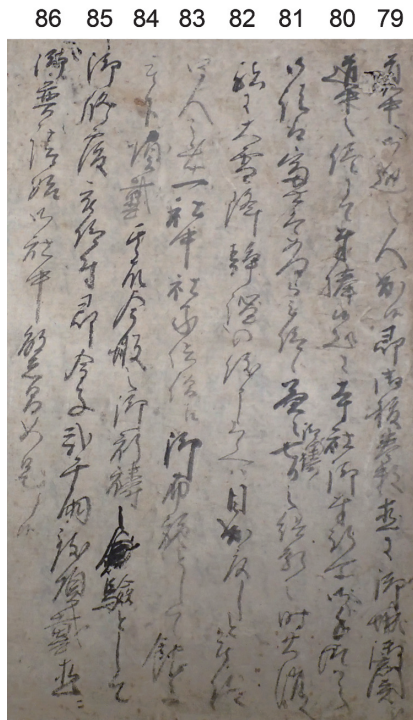


Photo 1. (f)

86 85 84 83 82 81 80 79

道中へ御迎之人出候即御被卷数直に御城御玄關^江
 道中之儘にて奉捧候処に寺社御奉行所御手つから
 御請取富士は如何と被仰候益々御祈禱七日之結願之時火消へ
 跡に大雪降静謐の儀申上候へハ目出度しと被仰
 四人之者一社中社家供僧^江御布施として銀子
 被下頂戴其故今般之御祈禱之験として
 御修覆被仰付即金子貳千両致頂戴直^ニ
 御普請始御社中繁昌如是に候

Fig. 2. (f)